

クマで町おこし！？-住民の普及啓発を促すフロリダのクマ祭り取材して-

桜井良（フロリダ大学大学院）

（ワイルドライフ・フォーラム、野生生物保護学会、15（2）：14-17 から抜粋）

はじめに

フロリダ大学がある Gainesville 市から車で南へ。湿原、農場と景色は変わっても、州の最大標高が 105m のフロリダでのドライブは、果てしなく続く平地を駆け抜けることを意味する。運転すること 1 時間半。たどり着いた町 Umatilla は、中心街にも商店が二、三ある程度の小さな町である。人口 2,500 人のこの田舎町の特色は、フロリダで最も高密度でアメリカクロクマが生息するオカラ国有林の入口に位置していることである。クマの生息地と隣接する Umatilla では、住民がクマを目撃することは日常茶飯事。フロリダ州魚類野生鳥獣保護局（以下 FWC）に寄せられる住民のクマに関する苦情の 9 割以上は、Umatilla を含むこのオカラ地域からのものである。この小さな町が一年に一度、フロリダ全土からの 10,000 人も訪問客で賑わう日がある。それは、クマ祭り（Florida Black Bear Festival）の日である。

クマ祭りについて説明する前に、まずはフロリダにおけるクマの存在について簡単に解説する。フロリダでは、クマを目撃することは幸運なこと、または祝福すべきことだと言われている。人々のクマに対する意識は至って肯定的で、オカラ地域に住む住民と話しても「クマは家の庭によく現れる。怖いと思ったことはない」といったことをよく聞く。FWC に寄せられるクマに関する苦情の 9 割が、クマが（ごみ等に）居ついてしまったというもので、日本でよく耳にする地域住民のクマに対する恐れや不安というものがフロリダではほとんど存在しない。人慣れしてしまったクマを FWC が捕獲しても、住民から「どうかそのクマを殺さないでほしい」という強い要望が出ることも珍しくはない。FWC のクマ研究者 Scheick 氏によれば、これは長年行われてきた様々なクマに関する普及啓発活動（小・中学校に導入されたクマカリキュラム、FWC スタッフによる地域コミュニティへの出前講座、教育パンフレットの配布、車につけるクマプレートの販売等）の成果であり、その中でも特に効果的なのが一年に一度大々的に行われるクマ祭りであるというのだ。

そのクマ祭りとは一体いかなるものなのか、普及啓発の場としてどのような効果を発揮しているのか、地元コミュニティにとってこの祭りはどのような意味を持っているのか、興味はつきない。この度、ワイルドライフ・フォーラムの取材制度に採用して頂き、上記の疑問を解決するべくクマ祭りの現場に向かった。

いざ、クマ祭りの会場へ

祭りが行われる中心街の広場に来ると、クマの形をした標識がそこそこに並べられていた。会場の入り口には FWC のブースが四つほどあり、森林局 (US Forest Service) のブースも立っている。それぞれにテーマがあり、クマの模型やはく製が置かれている場合やクマによる被害を防ぐための知恵を提供している場合など、どのブースにも子供連れの家族が熱心に FWC のスタッフの説明に聞き入っているのが印象的であった（写真 1）。

写真 1



入口付近で迎えてくれたのが、アメリカの国民的アイドル Smokey the Bear である。1960年代に吸い殻などが原因となって起こる山火事を防ぐために、アメリカ全土で行われたキャンペーンのマスコットキャラクターである。Smokey the Bear はその後テレビコマーシャルなど幅広いメディアの広告で使われたこともあり、今では Teddy Bear と並びアメリカでは知らない人はいないクマのキャラクターとなっている。

広場の中央部へと入ると、30 を超えるブースが出店されており、大変なにぎわいを見せていた。出店の内容は、フロリダクマ道路協会、フロリダ狩猟者団体などクマとの関わりのある団体から、木彫りアートの展示ブース、そしてフロリダ空手協会まで地域に関わりのある市民団体が幅広くブースを設けていた。興味深かったのが広場の至る所に設置されていたクマの形をした標識である。それぞれに「生ゴミは回収車に来る朝に出しましょう」など、クマによる軋轢を避けるためのアドバイスが書かれていて、歩きながらクマと共存していくための知恵を自然と学べるようになっていた（写真2）。広場のステージでは Umatilla 市の市長のあいさつとともに地元のジャズバンド部が演奏をしていた。また、会場にはプレゼンテーション専用のテントも設けられていて、FWC のクマ研究者がクマの生態について発表をしていた。

写真2



さて、肝心のこの祭りの役割についてブースのスタッフや訪問客に聞いてみたところ、誰もが共通して「この祭りは市民への（クマに関する）普及啓発の場です」という回答をしていたのが印象的であった。このように、クマ祭りの本来の目的がブースの展示者にも、また訪問客にもよく理解されているのだ。

一通り会場を見学した後、祭りの目玉イベントである FWC のクマ研究者とめぐるフィールドトリップに参加した。このトリップはかなり人気があるため、会場にて事前に予約する必要がある。出発 15 分前に集合場所に行くと、そこにはすでに人だかりができていた。みなフィールドトリップの参加者のようだ。大型バス 1 台を満員にして会場から 30 分のオカラ国有林へ。バスの中では森林局のスタッフがオカラ地域において年々増加していく人口とクマとの間に起こる問題について熱心に解説していた。

国有林の入口に到着した我々を迎えてくれたのは、FWC のスタッフとして 20 年以上クマの研究を続けている McCown 氏と彼のアシスタントであるフロリダ大学の野生動物学科の学生である。彼らがこの森をめぐるツアーの案内人である。参加者一人一人に給水用のペットボトルが配られ、いざクマの住む森へ（写真 3）。クマの生態について McCown 氏が季節ごとに解説し、参加者は実際に母グマが子育てをした巣や個体数調査のためのヘア・トラップ法（個体の体毛を採取する方法）を見学し、また、クマを捕獲するための麻酔銃の使用方法について、フロリダ大の学生によるデモンストレーションが行われた。

写真 3



クマ祭りが始まった 2000 年から毎年このフィールドトリップは開催されているが、例年定員一杯となる。今年も一日三回のツアーのために用意された大型バスは、いずれも満員になったという。また、フロリダ大学の学生がツアー終了後に参加者にプログラムの改善点がないかなど、評価のためのアンケートを実施していた。

祭りのもう一つの顔

主催者や参加者への聞き取りを続ける中で気付いた興味深い点は、このクマ祭りが地域に提供しているのは教育の機会だけではないということだ。

10 年前にこの祭りを開催する上で中心的人物であり、野生動物保護 NGO 「Defenders of

Wildlife (野生動物の擁護者)」のプログラムディレクターである McDonald 氏にお話を伺うことができた。この発端は、今から 10 年以上前、McDonald 氏がとある野生動物関係の学会で、野生動物をテーマにした祭りの効果に関する発表を聞いたことであった(補足資料参照)。大型食肉目などの野生動物は何かと人との軋轢が議論の争点になることが多いが、野生動物が提供する価値について焦点を当てた祭り、というアイデアは非常に新鮮であると感じ、フロリダ州でも実行できないかと、この話を FWC のスタッフに持ちかけた。「野生動物の中でも国民的に人気がありながら昨今人々との軋轢が増加していたクマに焦点を当てた祭りを実施しよう」ということで合意し、実際に祭りを行うコミュニティ(市町村)探しに奮闘した。対象となるコミュニティの条件としては、まずクマと人々との間に軋轢が存在する地域であり(従って住民のクマに対する意識が高いこと)、小規模のコミュニティでありながら訪問客を受け入れるだけの施設・設備があることであった。McDonald 氏が実際に各市町村を訪問した結果、オカラ国有林の入口である Umatilla 市が条件を満たし、しかも市の側もこのイベントに興味を示した。「初年度は訪問客が 500 人も来ないのでは」との不安もあったが、いざふたを開けてみると 3,000 人の訪問客でにぎわった。その後も毎年訪問客は増加していき、約 10,000 人が訪れた年も珍しくはないという。始まった当初は Defenders of Wildlife、FWC、そして野生動物に関わる団体が祭りの運営を担っていたが、Umatilla 市にとって欠かせないイベントとなった現在では、運営主体は完全に市の商工会議所(Chamber of Commerce)が担っている。人口 2,500 人の市に約 10,000 人の参加者が押し寄せるのであり、その訪問客が地元で食事をし、宿泊することによる経済効果は市にとって絶大である。これこそが McDonald 氏が目指していたことであるという。つまり、最初は NGO 等が運営を手伝うが、次第にイベントの効果・意義が確立するにつれて、地域コミュニティが自ら祭りを企画するようになることが祭りを持続可能に運営させるための大きな一歩なのである。

Umatilla 市の商工会議所所長に話をうかがったところ、このクマ祭りが生む効果、そして地域コミュニティに果たしている役割を確信することができた。彼女は、Umatilla 市にあるキャンプ場には一年におよそ 3,000 人のキャンパーが来るため、クマとの軋轢が増加していたことが祭りのきっかけであったが、今では経済効果の面でも Umatilla 市にとってなくてはならない存在になったと話してくれた。そして、「私たち商工会議所が中心になって今後も祭りを盛り上げていきます」と意気込んでいた。

野生動物は市町村の活性化に力を貸す潜在的可能性を秘めている。我が国でも野生動物と関連させて地域の活性化を狙う試みは、対馬での佐護米づくりや豊岡での「コウノトリの舞」などが存在し、これらは野生動物をテーマとし、環境に配慮した米づくりの例である。フロリダのクマ祭りは、クマという人間との軋轢を生むこともある動物を対象とし、また農業(米づくり等)など他の活動と関連させることがなくても、クマだけをテーマにして、見事に集客できることを示している。

新しいことを始める時には、実現可能性や実効性などへの不安はつきものである。Defenders of Wildlife と FWC が始めた当初も、まったく同様の状況であったという。「最初は人が全く来ないのではないかと不安でたまらなかった」と話す McDonald 氏であるが、今では

Defenders of Wildlife はサポート役にまわり、企画運営は全て市が行っている。更に Umatilla での成功モデルを応用し、フロリダ北部の町でもクマ祭りの企画がされている。また、Defenders of Wildlife はクマだけでなくフロリダパンサー（ピューマの亜種）に関する祭りも企画している。これらは全て、クマ祭りの成功体験を基に企画されている。

「事業は人なり」はパナソニックの創始者、松下幸之助の有名な言葉であるが、数あるアイデアの中でその地域に住む人々、地域の文化や歴史を理解したうえで、その地域にふさわしいものを選択し、実行し、形にするには、結局は人が重要なのだと思う。クマ祭りではそれが NGO のリーダーである McDonald 氏であり、共に働いた FWC のスタッフ達であった。我が国でもクマとの共存を考える上で、また地域への普及啓発を考える上でも、フロリダの事例から学べることがあるのではないだろうか。

補足：野生動物をモチーフとしたお祭りは全米各地で開催されているが、[Watchable Wildlife Incorporated](http://www.watchablewildlife.org/default.htm) (<http://www.watchablewildlife.org/default.htm>) のように、野生動物が地域に生み出す経済的な利益について検討し、その機会を創出することを専門とする NGO 団体もアメリカには存在する。